《奇跡》

作・佐野和敏

《登場人物》

【願い】

①父
②姉
③妹

【新種】

④助手①
⑤助手②
⑥助手③

【任務】

⑦指揮官①
⑧指揮官②
⑨指揮官③

【ハッピーハロウィン】

⑩霊①
⑪霊②
⑫霊③

【ウサギとカメ】

⑬ 実況　（じっきょう）

⑭ 小出田監督　（こいでたかんとく）

⑮ 足軽　（あしがる）

⑯ ギジバト

【誓い】

⑰ 男①

⑱ 男②

【プロローグ】

舞台中央に宝箱が置いてある。
錠がかかってふたが閉じられている。
鍵が箱の前に置いてある。

暗転

暗転中に鍵のあく音が聞こえる。
灯りが付くと宝箱のふたがあいている。
いろいろな方向から人が登場する。

新種①　「わたしは箱を持っている」
誓い①　「僕は箱を持っている」
姉　「わたしは……奇跡を見たことがある」
足軽　「僕は……奇跡を見たことがある」
霊②・白鳥　「わたしたちは……奇跡を見たことがある」
指揮官②　「僕はあの日……奇跡を見た」
妹　「わたしはあの日……奇跡を見た」

新種③・監督　「僕たちは……あの日……奇跡を見た」
霊①・新種②　「わたしたちは……あの日……奇跡を見た」
指揮官①　「僕は奇跡を知っている」
父　「わたしは奇跡を知っている」
霊③・誓い②　「僕たちは奇跡を知っている」
指揮官③・キジ　「わたし達は奇跡を知っている」
全員　「そう！わたし達は奇跡の箱を持っている」

全員が箱を見る。

暗転

【願い】

ある家庭。
家の中・リビング。夜。
姉、妹が落ち着きなく右往左往している。

妹　「遅いなあ……ねえ、もうすぐ始まっちゃうよ」
姉　「分かってるって。大丈夫よ、多分……」
妹　「多分って……そんな悠長なこと言ってていいの？一世一代の大舞台なのよ」
姉　「そんなこと言ったってしょうがないでしょ。きっと走ってるわよ」
妹　「ああ！まだかな！遅いなあ！！ねえ、お姉ちゃん電話してみなよ！」
姉　「したわよ！さっきから何回もしてるんだけど出ないのよ」
妹　「ああ、もう！なにやってんだろ！」

と、そこへ、突然父が駆け込んでくる。

父　「いや～～！！お待たせお待たせ！！」
妹　「何やってんのよ、パパ！遅いなあ！」
父　「これでも急いできたんだよ」
妹　「遅い！遅い！遅い！」

父　「そんなに怒るなって。急いできたんだから」
姉　「それにしても遅かったんじゃないの？」
父　「どこも売り切れで中々なくてさ。橋の向こうのスーパーでやっと見つけたんだよ」
妹　「だから言ったのよ。前もって用意しとけって」
父　「余分なのがうちにあると思ったんだよ」

買い物袋からDVDを出す父。

姉　「あれ！？」
父　「どうした！？間違えて買ってきたか！？」
姉　「いや、そうじゃなくて……（DVDを持ち）これ買いに行ってたの？」
妹　「うん……どうしたの？」
姉　「ええ！あたし、ビールとかワインとか買いに行ってて、飲みながら盛り上がるのかと思ったよ」
父　「こんな時に酒でもないだろ」
妹　「もういいからさ、早くセットしてよ。始まるよ」
父　「ああ、そうだな」
姉　「もう、してあるよ」
父妹　「え……？」
姉　「もうセットしてある」

父「もうセットって……買って来てくれてたのか？」
妹「そうなら、そうって言ってよ。パパ大変なんだから」
姉「買ってきてないけど、セットしてある」
父「ん？」
妹「どういうことよ」
姉「だから！ハードディスクに録画するようにセットしてある」
父「ハードディスク……？」
妹「あ、そうか……その手があったか」
姉「その手があったかじゃないわよ。考えればすぐ分かるでしょ」
妹「いや、あたしもなんかテンパっちゃってさ」
父「ハードディスク？」
姉「うちのDVDプレーヤーは、直接、機械に録画して撮り溜めしておけるのよ」
父「そうなのか！？」
妹「そうみたい……（罰が悪い）忘れてた」
父「なんだよ、そうなのかあ」
妹「ごめんね。急かしたメール送って」
父「まあ、取りあえずこれで一安心だな」
妹「でも、すごいねえ。このあたりのDVD、売り切れちゃうなんて。人気だねぇ」
父「ありがたいことだな」

姉「そうね。まさかそんなに応援してくれてる人がいるとはね」
父「普段興味のない人もオリンピックの時だけは盛り上がるからなあ」
姉「しかも、地元からだから余計よね」
妹「大丈夫！お兄ちゃんならきっと金メダル取るよ」
姉「そうね。取ってほしいわね。日本人初だからね」
妹「日本人初か……」
父「そうだな。取ってほしいな。せめて銀か銅でもいいんだけどな」
妹「ダメよ。やっぱり狙うなら金でしょ。こういうのは攻めなきゃダメなんだよ。守りに入ったら負けるんだよ。って、お兄ちゃんが言ってた」
父「そうか……攻めてほしいな」
妹「すごいねえ、お兄ちゃん」
姉「まだ取ったわけじゃないでしょ。これからなのよ」
妹「あは。そうだった。でも緊張するんだろうなあ」
父「そりゃそうだろ。パパはダメだな。そういうのに向いてないからな」
姉「そうよねぇ。パパはプレッシャーに弱いからなぁ。壮行会の時に一言お願いしますとか言われて、しどろもどろだったもんね」
父「パパは、ああいう、大勢の前で喋るのとかは苦手なんだよ」
妹「ねえ、そろそろかな？」
父「そろそろか！」

父が妻の遺影と箱を持ってくる。

父　「ママにも見せてあげないとな」
妹　「そうだね。ママも一緒に応援しようね。（父に）なに、その箱？」
父　「ん？これか？これはパパとママの夢の箱だよ」
姉　「夢の箱？」
父　「ママとパパの夢が入っているんだよ」
妹　「夢……？」
父　「そう。ママが夢に向かって頑張ってた時のモノが入ってるんだよ。これは全日本の時、これは世界選手権の時のかな。これが……」

金メダルが数個出てくる。

姉　「そうか。ママはオリンピック目指してたんだもんね」
父　「目指してたっていうより、オリンピック選手だったんだよ」
妹　「ああ、それ聞いたことある。でも、結局、オリンピックには出られなかったんでしょ？」
父　「そう」
妹　「なんでだっけ？なんか理由聞いたけどよく分かんなかったような……」
姉　「理由を聞いた時は、あんたはまだ小さかったからね。１９８０年、共産圏初のモスクワでオリンピックが開かれることになったの。日本は政治的理由からボイコットすることを決定したのよ」

妹「ボイコット？」
姉「要するに不参加することにしたの」
妹「ふーん……政治的理由っていうのは？」
姉「（考える）うーん……そこは、パパがご説明致します。どうぞ」
父「（咳払い）ううん。では、そこはパパがご説明致しましょう。政治的理由っていうのは、当時、冷戦でソ連と対立関係にあったアメリカがボイコットすることを決めて、それで、アメリカからの呼びかけがあって、日本政府はボイコットすることにしたんだよ。当時から日本はアメリカと同盟関係にあったからね」
妹「なんかいろいろ難しいのね」
姉「ママはその時、代表チームの選手に選ばれてたんだけど、結局出れなかったという訳よ」
父「次のオリンピックも目指して頑張ってたんだけど……故障したりで……次のオリンピックでは代表選手になれなかったんだ」
妹「そうだったの……可哀想だね、ママ」
父「まあ、そんな時代だったんだよ。（箱の中を見る）おう！それからこれがお前たちのへその緒（３つ出す）」
妹「へその緒が夢なの？」
父「そうじゃなくて、お前たちが生れてからは……ありきたりだけど……『子供たちが、健やかに育ちますように』っていう願いがパパとママの夢になったんだよ」

姉「素敵」
父「ありがと」
妹「わたしもパパのことちょっと見直しちゃった」
父「！ちょっと……？ちょっとかい！？」

と、おもむろに立ち上がりキッチンへ行く。

姉「あ、パパ。あたしのもお願い」
父「なにが？」
姉「ビール取りに行ったんでしょ？」
父「おっ！なんでわかった？」
姉「思い出話で、なんか寂しくなっちゃったのかなぁっと……こんな時は、やっぱ『酒でしょ』って思ったわけよ」
妹「さすが、お姉ちゃん。やるねえ！」
姉「あと、なんかつまみも頂戴」
父「つまみって、お前……」
妹「わたしもなんか食べたい」
父「なんだよ、お前たちは。人使い荒いなあ……」
姉「立ってる者は親でも使え。って言うでしょ」
妹「その辺にあるポテチとかでいいから、適当に持ってきて」
父「しょうがねえなあ」

妹　「ああ！パパ！パパ！早く早く！始まるよ！」

父が手ぶらで急いで戻ってくる。

姉　「あれ？ビールは？」

妹　「お菓子は？」

父　「それどこじゃないだろ」

姉　「そんなにすぐ始まらないから、まだ大丈夫だよ」

妹　「はい！行ってくる！」

父　「はい（キッチンへ行く）」

姉　「ねえ、今度は本当に始まりそうだよ」

妹　「急いで急いで」

父　「はいはいはいはい。お待たせ～！頼むぞ息子よ……奇跡を起こせ」

三人が固唾を飲んでテレビに見入る。

暗転

【新種】

灯りが付くと、白衣を着た助手たちがいる。
期待の表情で対象物を見つめている。

助手①　「来た？」
助手②　「来るよ」
助手③　「来るか」

固唾を飲んで見守っている三人。

①「どう？」
②「ん～……」
③「来ないねえ」
①「まだか……」
②「まだみたいですねぇ」
③「ですなあ」

沈黙

①②③「（気が抜ける）ああ～、もう……なんだよ～」

ガックリ腰を下ろす三人。

③「だいたいさ、そんな簡単に見れるもんじゃないんじゃないの？」
②「見れるもんじゃないんだよ」
①「そりゃそうよ。教授が一〇年研究してて一度も見たことないってんだから」
③「そうなの？教授、一度も見たことないの？」
①「て、言ってたよ」
②「そりゃ無理だわ」
③「やだよ、オレは……開花の瞬間を見るためだけに一〇年を費やすのは」
①「わたしも」
②「わたしだって」
③「開花して初めて成功なんだろ？」
①「うん……」
②「大変そう……」
③「そういえば教授は？」
②「隣の部屋で新種の開発だって」
①「こっちの新種もまだ開花してないのに、なに開発してるの？」

②　③　②　①　②　③　②　①　③　②　①　②　③　①　②　③　①　②　①

「さあ？」
「しかし、すげ～な～教授は。研究とはいえ、なんだってこんな地味なことをずっとやってられるのかねぇ」
「確かにね。好きなこととはいえ、ちょっと地味すぎるわよね」
「教授が前に言ってたけど、新種の発見とか今まで映像や資料でしか見聞きしたことのないモノを生で見た時の感動が忘れられなくて続けてきたって言ってたよ」
「そりゃ、とてつもなく大きな感動は味わいたいわよ」
「でもなあ、そこにたどり着くまでの時間が長いよなあ」
「そう！問題はそこなのよ」
「なあ、青いバラの話し知ってるか？」
「青いバラ……？」
「青いバラを作った人たちの話しでしょ？」
「そう」
「なに？わたし知らない」
「昔から青いバラを作ることは無理だと言われてきたんだよ」
「バラには青い色素が含まれてないのは知ってるでしょ」
「うん」
「だけど、近年になってバイオテクノロジーの進化で、パンジーから取り出した青い色素の遺伝子をバラに組み込むことによって、青いバラを作

ることに成功した研究者たちがいるのよ」
③「その研究者たちは人生を青いバラに捧げてきたってことらしいよ。その研究は陽の目を見たから良かったけど……そんな大それた研究じゃないぞ……この新種の開花は……人生費やすか……？」
①「それはちょっと苦しいわねぇ……ちなみに青いバラの花言葉は“奇跡”らしいわよ」
③「奇跡ねぇ。奇跡ってさ、そんな簡単に起こらないから奇跡なんだろ」
②「ですよねぇ」

と、花のつぼみを見ている三人の眼が輝き始める。

②「ねえ、つぼみが少し開いてきたんじゃないの？」
③「ああ！そんな気がする。（①に）なあ」
①「うん。わたしもそんな気がする」
②「た、た、た、大変……！急いで教授に知らせなきゃ……」
①「そうね！え～と誰が行く？」
③「え！？誰って？誰でも良いんじゃないの？！」
①「そうか……じゃあ、わたしが行く（行こうとする）」
③「待て待て待て待て……」
①「なに！？」

②「どしたの？」
③「花って……そんな突然、パッて咲くか！？」
②「確かに」
①「それが分からないから新種なんでしょ」
③「そうか……じゃあ、やっぱり急いで教授に！」
②「待って待って待って」
③「どした？」
①「なに！？」
②「ねえ、これって咲いたら何色の花が咲くの？」
③「色？」
②「そりゃあ、花なんだから色とかあるでしょ」
①「色か……」
②「教授なんか言ってなかったっけ？」
③「さあ！？」
①「そういえば……」
②③「（興味深げに）うん！」
①「涙色とか言ってたような……」
③「ふう！シャレおつ！」
②「なにそれ？」
③「なにが？」

①「だから、その『シャレおつ』って」
③「オッシャレ〜って意味だよ！」
②「あんたが意味わかんないわ」
③「で、その涙色ってどんな色なの？」
①「さあ？」
②「さあ？って……それは聞かなかったの？」
①「聞いたわよ」
③「そしたら？」
①「そしたら！……教授もまだ見たことないから分からんって」
②「そりゃそうだ」
③「ごもっとも」
②「でも、なんかヒントぐらいあるんじゃないの？」
①「教授が言うには……たぶん……見る人によって違う色に見えるんじゃないかって」
②「どういうこと？」
①「その花を見たら、感動で涙があふれ出るはずだから、見た人の気持ち次第で色が違って見えるらしいよ」
②「へえ！」
③「どれ〜！」

三人が対象物のつぼみを覗き込む。

②「あれ？」
③「うん……」
①「動いてる？」
②③「うん！」
②「なんかプルプルしてるよね？」
②③「してる！」
③「生まれるか？！」
②「生まれるかも！」

三人が焦り始める。

①「ああ……あたし先生に知らせてくる！」
③「ああ！早くな！」
①「分かった！」
②「ほら！早く行って！生れちゃうわよ！」
①「だって！わたしも見たいんだもん！」
②③「早く～！！」
①「先生～！生れる～！」

三人は焦って右往左往する。

暗転

【任務】

暗転の中、電話のベル音が次々にけたたましくなっている。
灯りが付くと、指揮官①②③がクレーム対応している。

指揮官①　「申し訳ありません。ただちに修理の者を伺わせます、です。はい……」
指揮官②　「さようでございましたか。すぐに対応いたします……」
指揮官③　「はい。はい。それはもう重々に……」
①②③　「申し訳ございません。失礼いたします」

三人が電話を切る。
三人は立ち上がり、歩く。
と、場面が別の場所に変わる。

①　「いいか！君たちは選ばれし精鋭だ！恐れるものは何もない」
②　「ここまで来るのに苦しい訓練を積んできたことだろう」
③　「実戦はいつやってくるか分からない」
①　「しかし、往々にして出動命令が出るのは夜間が多い」
②　「しかも、ある一定の時期に限定されていることは、すでに周知のとおり

③　である」
「これまでの厳しい訓練に耐えられず挫折する者、メンタルを病んでしまった者、しっかりとした食事管理が出来ず痩せ衰えてしまった者……」
①「それらの者には残念ながら去ってもらった」
②「ということは、君らは幾多もの訓練をかいくぐってきた猛者たちなのだぞ！」
③「超エリートという言葉は、まさに君たちのためにあるようなもの……だった」
②「それなのにこの醜態の数々はなんだ！？」
①「煙突が壊れた」
②「窓枠のサッシが外れた」
③「姿を見られた」
①「挙句の果てにはオーダーの商品と違う商品が届いたという、あってはならないクレームの数々」
②「この失態を君らはどうするつもりだ？！え？１号」
③「なんとか言ったらどうなんだ。２号、３号」

５号を見ると上着を着ていない。

②「ん？５号……なんだその恰好は？上着はどうした」

①「なにぃ！？落としてしまった？」
③「貴様は我々のトレードマークでもある大切なジャケットを落としたというのか？」

②が手に持っている書類を確認する。

②「待て、待て……ここに5号のデータがある。貴様、落としたのではないな。配達途中に置いてきたんだな」
①「んん？置いてきた……」
②「いかにも」
③「なにをやっとるんだ！」
②「上着は我々の大切なユニホームだ。落とそうが置いてこようが、それが無ければ任務に就くことはできん」
①「繁忙期だが……残念ながら今夜の任務からは外れてもらう。いいな？」
③「（全員に向かって）いいか！我々の任務は今夜もう一日残っている」
②「昨夜がピークだったが、気を抜かずに任務をやりきってほしい」
③「まだ夢や希望を抱いて待っている人が沢山いる」
①「その人たちを裏切るな」
②「全員、準備にかかれ！」
③「5号……来い」

③が大きな袋を指し出す。

①「お前宛に届いた」
②「お前が届けた商品だ」
③「返品だ」
②「返品されたということは、届ける商品を間違えたということだ」

③が袋を開ける。
サンタクロースのジャケットが出てくる。
胸に5号のマークがある。

③「？？メッセージがある。昨夜はとても寒かったのに、ポチに上着をかけてくれてありがとう。ポチも喜んでいます。ポチは今夜から部屋の中で一緒に寝ることになりました。サンタさんも風邪をひかないように頑張って下さい。メリークリスマス」

①「気持ちは買うがミスはミスだ。上着は脱ぐな！いいな？」
②「今夜ミスったら、お前に来年はないぞ」
③「お前たちは奇跡をおこせるんだ」
①「奇跡を見せてやれ」

③がジャケットを５号に放り投げる。

②

「準備にかかれ」

暗転

【ハッピーハロウィン】

お墓が３つ並んでいる。
その前で掃除している②③。
①が登場してくる。

①「おはようございます」
②「おはようございます」
③「おはようございます」
①「いや～精が出ますね。こんなに早くから掃除ですか？」
②「ええ、まあ」
①「（③に）お宅さんもですか？」
③「はい……そんな時期ですから」
①「そうですねぇ……そんな時期ですねぇ……今日も暑いですねえ」
③「暑いですねえ……今日も猛暑日になりそうですよ」
①「でしょうねえ……この時間で、この暑さじゃねえ……」
②「だから、早いうちに少しでも片付けとこうかと思いまして……こうやって朝早くからやってるというわけです」
③「多少なりとも綺麗にしといたほうがこれから来る人も楽かなぁと……」

②　①　②
「綺麗な方が気持ちもいいですからね」
「そりゃそうですよ……そうですとも……そうですよね……そうか……じゃ、わたしも少しやっとこうかな」
②　「その方がいいんじゃないですか……誰が来ても綺麗にはしてくれるんですけどね。でも、少しでも負担を少なくした方がいいかなと思いまして。なんせこの暑さですからねえ」
③　「まあ、わたしもそちらさんからそんな話しを聞いて、早速、始めたわけです」
①　「そうでしたか。いやーわたしは夕べ夜更かしをしちゃいまして……今朝はもうこの時間ですよ。お二人に遅れを取らないように始めようかな」
②　「あら、夕べは遅かったんですか？」
①　「はい……」
③　「そりゃ、お盆ともなると、いろいろと野暮用も増えますよねぇ」
①　「（喋りにくそうに）ええ、まあ……」
③　「どうしたんです？なんか悪いこと聞いちゃいました？」
①　「いいえ、そういうわけじゃないんですけど……」
②　「（遮るように）ああ！いいんですよ。言いにくい事なら無理して言わなくたって……（③に）ね、我々はお互いに干渉しない……」
③　「そうですよ……そんな気を遣う必要もないんですから……ここは、そう

いうとこじゃないですか」
③「そうですよ……（辺りのお墓を見廻し）ここはそういうところです……」
①「はい……ありがとうございます」
③「まあ、とにかく、まずは掃除をやっちゃいましょう」
②「そうですね」

掃除の続きを始める②③。
掃除用具を取ってくるが立ち尽くす①。

①「あのー実はわたし……昨夜は、あちこちの家を探索してまして……」
③「探索……？」
②「そりゃまた……（どうして？）」
③「（②に）あんまり立ち入ったことを聞かないほうが……」
①「あぁ……いいんです。自分だけで考えてても滅入るだけなので、逆に聞いてもらった方が……」
③「そうですか……じゃあ、立ち入ったことをお聞きしますけど……どうして？」
①「皆さんは惜しまれつつだったのでしょうが……わたしは惜しまれなかったんで……」

②「惜しまれなかった……？」
①「はい……私は……結婚式の指輪の交換の真っ最中に式場から逃げ出してしまったんです」
②「ええ！」
③「式場から逃げ出した……」
①「はい」
②「なんでまた？」
①「それは……」
③「親の政略結婚だった？」
①「いいえ」
②「気の進まないお見合いで、断れなくなって結婚することになった」
①「いいえ」
③『卒業』の映画のように元彼があなたを奪いに来た？」
①「いいえ」
③「あれ？おっかしいなあ……」
①「卒業ってなんですか？」
③「あれ？知らない？１９６８年公開のアメリカ映画『卒業』」
①「全然」
②「知りません」

③「あ、そう……いい映画なんですけどね……」
②「結婚が嫌じゃなかったら、逃げたりしないでしょ」
③「分かった！他に好きな人がいたんだ」
①「いい加減にしてください。違います」
②「じゃあ、なんで逃げたの？」
①「マリッジブルー……まさに……それでした」
②「マリッジブルーって、結婚式当日まで続くもんなの？」
③「式の当日は……花嫁さんは、もう幸せ気分一色という感じがするけどねえ？」
②「わたしもそう思ってました」
①「でも、わたしは当日になっても不安が頭から離れず、このまま結婚して良いのか、本当にこの人の妻として相応しいのか……わたしはこの人と結婚して本当に幸せになれるのか……そんな言葉ばかりが頭をよぎって憂鬱な気持ちが消えなかったんです……」
③「それで、逃げ出してしまった……」
①「わたしは、式場の入り口を飛び出しました……いえ、飛び出したつもりでした……しかし、そこは４階のバルコニーだったんです。わたしは勢いあまってそのまま転落しました。昨年の十月三十一日です」
③「ハッピ～～！ハロウィン！」

②「不謹慎ですよ！命日なんですから」
③「あっ、すみません。式の当日がハッピーハロウィンなんだと思ったら、ついつい……」
①「ああ、いいんです。結婚式の日がハロウィンとかぶってれば忘れないだろうし、本当にハッピーかなと思って、二人でその日に決めたんですから……式場にもかぼちゃのオブジェとかを飾ったりして……ハロウィン色も出そうと工夫してたんですが……」
②「でも、結局、ここに……」
①「はい……わたしは、死ぬつもりだったわけではなく……たまたま落ちてしまっただけなんです……その場の人達には自殺だと思われてしまったようで……その後、家族も肩身が狭かったと思います」
②「そりゃ、まあ、状況が状況だけにね……そう取られても仕方がないっちゃあ、仕方がないような……」
③「ご家族も辛いでしょうが……新郎もたまらないんじゃないの……」
②「新郎のことはどう思ってるの？」
①「そりゃあ、もちろん結婚しようと思った人ですから、いまでも愛しています。でも、当時は……いつもなんだか得体の知れない不安に襲われてしまってて……」
③「それが、マリッジブルーってヤツですね……きっと」

①「だから、わたしは、わたしと同じようにマリッジブルーで悩んでいる人達に何かお手伝いができないかと……少しでも安心させてあげられればと思って……夢の中に現れているかのようにして、夢枕に立つようにしてるんです。それで幽霊ではなく、何かが降臨してきたようにしてお告げみたいに伝えると、意外と皆さんすんなりと受け入れてくれるんです」

②「昨夜の探索っていうのも……？」

①「はい……何軒も回ったので夜明け近くになってしまって……疲れました……新盆とはいえ……どうせ、わたしのところへは誰もお参りに来ないだろうし……ゆっくり起きればいいかなと思って……」

②「そんなにいるもんなの？マリッジブルー患者？とでも言いましょうか。その……幸せなのに結婚という病を抱えてる人って……」

①「これが実に多いんです」

③「はあ～！いるもんなんですねえ……結婚とは幸福なのか、はたまた不幸なのか……それが問題だ」

②「自分の抱えてる不安を分かってくれて……しかも、それを癒し……諭してくれるような存在が夢の中に現れる……か……」

③「奇跡にでも出会ったような気持ちになるんじゃないの……スーっと胸のつかえがなくなるような……」

②「その人にとっては、まさに奇跡がおこったんですね」

①「奇跡ですか……そんな大それたことはしてないんですよ……（掃除を始める）」

③「奇跡というのは、その人の捉え方次第でしょ……その人が奇跡だと感じれば、それはもう奇跡なんだよ」

②「きっと誰にでも起こせるチャンスがあるんじゃないかな」

③「でも、起こそうと思っても簡単には起こせない。それには邪な気持ちを排除しないとね」

②「確かに邪念はよろしくないですね……でも、感じることなら、いつでも、誰にでも出来るんじゃない」

③「うん……そうだね。その人の感じ方次第だからねぇ」

③が遠くの人影に気付く。

①は興味なく掃除の続きを始める。

③「ねえ、早速、お参りの人が来たみたいよ」

②「おっ！ほんとだ！朝早いですねえ」

③「朝も早くからご苦労様です！」

②「どちら様のお身内の方かな……」

③「そこの小道を……曲がるか？曲がらないでこっちにくるか？さあ、どっ

ちだ！」

②「曲がらないで、こっちに来ますよ」

③「ということは、我々のどちらかになりますかね？」

②「ん～……どうやら、うちの知り合いではなさそうです」

③「じゃあ、うちかな？あれ？……」

②「あれって……もしかして……ハロウィンの飾り物じゃないですか……」

お墓参りに来た人が①の前で止まった反応をする②③。
手にハロウィンの飾り物を持っている。

②③　「……ハッピーハロウィン……」

①が振り返ると驚きと嬉しさに満ちた表情になる。

暗転

【ウサギとカメ】

ファンファーレが流れ、スタートのピストルの音が流れる。
灯りがつくと、そこは実況席である。

実況　「さあ、ついにこの日がやって参りました！！と言いますか、いよいよ始まりました。『世紀の一戦』とはまさにこのことですねぇ！もうすでに選手はスタートしているわけですが、本日のゲスト、そして解説の方々をご紹介して参りましょう。本日のゲスト解説は数々の金メダリスト育ててきた、マラソン界の重鎮、金メダリスト請負人という名を欲しいままにしてきた小出田監督にお越し頂きました。監督、どうぞ、よろしくお願いします」

監督　「よろしくお願いします」

実況　「そして、もうおひとかた、小出田監督のお隣にお座りいただいております、今回、両選手の友人でもあり、自らもマラソンが趣味でいらっしゃる足軽さんにもお越し頂いております。足軽さん、よろしくお願いします」

足軽　「こちらこそ、どうぞよろしくお願いします」

実況　「さらには、現場から選手の生の息遣い、緊張感を伝えていただくためにも現場レポーターに桃太郎界のマドンナ、キジバトちゃんに来てい

ただいております。キジバトちゃ～ん、現場のホットな情報をお願いしますね～！」

キジ「は～い！こちらキジバトで～す！とってもホットで熱い情報をお届けしますよ～！楽しみに待っていてくだ～さ～い！」

実況「そしてそして、申し遅れましたが、本日の緊張感あふれる戦いを寸分漏らさずお伝えいたしたいと思っております、実況はわたくし、『バード！……バード・白鳥！』が、お送りいたします。どうぞ、よろしくお願いいたします。さて、監督ついにこの日が来ましたねぇ。監督はこのレースをどのように予想されておりますか？」

監督「そうですねぇ！まずは、大方の予想通りピョン吉がスタートダッシュを切りましたから、その勢いで一気にどこまで差を広げられるか、そしてそのままゴールした時に亀次郎とどのくらいの差がついているかということだと思うんですが、しかし、レースというのは最後まで分かりませんからねえ。どうなるのか楽しみです！」

実況「確かに楽しみですねえ。下馬評通りピョン吉が一気にゴールまで駆け抜けるのか。はたまた亀次郎が一矢報いることが出来るのか。そもそも何がほったんでこうなってしまったんですかねぇ？足軽さん。何か放送しても大丈夫な程度の情報をお持ちだったらお願いします」

足軽「はい。思い起こせばピョン吉と亀次郎のほんのちょっとした言い争いから始まってしまったんです。亀次郎が亀界では走るのが一番早いと

いう話しになり、それをピョン吉が所詮はのろまな亀。ドングリの背比べも良いとこだと、バカにしたことから始まったんです」

実況　「なるほど。ありがとうございます。そして、このいざこざに、ついに今日終止符が打たれるというわけですねえ」

足軽　「はい。そういうことになります」

実況　「レースの方は順調にピョン吉がリードしているようですが、レポーターのキジバトちゃん？そちらの様子はどうですか？」

キジ　「はい～！こちらキジバトです～！わたくしは現在ピョン吉選手の上空に来ております。ピョン吉選手は快調に飛ばしてますよ。沿道からの多くの声援で、ややテンションが高いせいかハイペースで飛ばしております」

実況　「監督、ややハイペースということですが、その辺はどのように見ますか？」

監督　「そうですねえ……ハイペースとはいっても持って生まれた才能といいますか、ＤＮＡがあるわけですからねえ……それで後半崩れるということはそうはないと思いますよ」

実況　「そうですねえ！やはりピョン吉が強いですねえ！キジバトちゃん、亀次郎の方はどうですか？」

キジ　「ちょっとお待ちくださ～い！いま、亀次郎選手の方に飛んでいきます！」

実況　「は～い！急がせてごめんね、キジバトちゃ～ん！」

キジ「大丈夫で～す！わたしは風に乗っているだけですから！はい！亀次郎選手の上空に到着しました。亀次郎選手はただひたすら黙々とマイペースで進んでいるという感じです。その歩みは決して速いとは言えませんが、闘志に溢れているのは上空からでも充分わかります」

実況「キジバトちゃん、分かりやすいレポートをありがとうございます。亀次郎の持ち前の辛抱強さが、どう発揮されるかが楽しみでもありますねえ、足軽さん」

足軽「そうですねえ！亀選手は地味ですが努力家ですからねえ」

キジ「白鳥さん！聞こえますか！？」

実況「はい、聞こえますよ、キジバトちゃん」

キジ「お話し中、すいません！」

実況「大丈夫ですよ。どうかしましたか？」

キジ「はい！突然、ピョン吉選手が歩みを止めてしまいました！」

実況「お～～っと！ピョン吉に何か起こった模様です！キジバトちゃん、細かいことが分かったら教えてください」

キジ「はい」

実況「監督、ピョン吉が急に足取りを止めてしまったようですが、なにが起こったと考えられますか？」

監督「そうですねえ！スタートからのハイペースで足に来たか、肺に来たということでしょうかね……ややオーバーワークになってしまうと、い

つもは大丈夫でも急にガクッと来る時がありますからねえ」
実況「そうですか」
キジ「白鳥さん！こちらキジバトです。ピョン吉選手の止まった様子なんですが、どうやら沿道にいる女子たちと話しをしてるようです」
実況「？沿道にいる女子たちと話し……足軽さん、どうことなんでしょうかね？」
足軽「え～、多分なんですが、女子との友好的コミュニケーションというものではないでしょうか」
実況「女子との友好的コミュニケーション……？」
足軽「分かりやすく言いますと、ナンパではないでしょうか？」
実況・監督「ナンパ？」
キジ「白鳥さん！？上空の私からも、どうやらそんな感じに見えますね」
実況「ナンパ……ですか……？」
キジ「はい。ピョン吉選手はかなりイケメンなので女子の人気も高いですしね」
実況「それにしてもレース中ですよ」
足軽「実は、ピョン吉は元々スピードという持って生まれた才能がありますが、身持ちが軽いという才能もあってですね……自分がやってることに余裕が出てしまうと、怠けるというか適当になるというか、集中力が切れてしまうんですね。そうなると、他のことに目が向いてしまう

性格なんです」
実況「それにしてもですよ！」
キジ「白鳥さん！？ピョン吉選手ですが、かなりの女子に囲まれてウハウハ状態になっています。わたしもこれから地上に降りて近くからレポートしてみたいと思います」
実況「分かりました。かなりの人だかりのようですから、キジバトちゃんも気を付けて下さいね」
キジ「はい、了解しました」
実況「足軽さん、かなりの女子に囲まれてるということですが」
足軽「そうなんですよ。また、彼はよくモテるんですよ」
キジ「白鳥さん。私も地上に降り立って、いまその群衆の中に飲み込まれてきましたが、確かに噂通り、いや噂以上に（うっとりしながら）ピョン吉選手は素敵ですねえ……」
実況「あれ？キジバトちゃん？正気を取り戻して！お仕事を忘れてますよ！キジバトちゃん！」
キジ「（咳払いをし）あっ！失礼しました！こちらキジバトちゃん、いえ、キジバトです！」
実況「大丈夫ですか？」
キジ「はい！（驚き）大丈夫……じゃ……ありません」
実況「どうしました！？」

キジ　「このドサクサがこうじている間に、亀次郎選手がピョン吉選手のナンパの群れを追い越して、はるか遠くを歩んでいます」
実況　「お～～～っと！ここで新たな展開です！！ピョン吉のクセの悪さが露呈している間に亀次郎はすでにゴール目前まで進んでいました！」
監督　「ついに亀次郎の本領発揮という感じですね。亀次郎は歩みはノロいですがペースが落ちないですからねえ」
キジ　「白鳥さん！」
実況　「はい、キジバトちゃん」
キジ　「ピョン吉選手も亀次郎選手に抜かれたことに気付いて走り始めましたが、『時すでに遅し』といったところでしょうか、亀次郎選手はまもなくゴールを迎えようとしています」
実況　「なんということでしょう！大方の予想を覆して、いままさに世紀の瞬間を迎えようとしております！確かに実況席からもハッキリと亀次郎が先頭で帰ってきたのが見えています！どう考えてもウサギよりノロいと思われていた亀がいままさにゴールしようとしています！いま！ゴールしました！そして、遅れを取ってしまったピョン吉が戻って参りました。まさかこういう結果になるとは誰が予想したことでしょう。足軽さん、一言いただけますか？」
足軽　「はい。実は……わたしは、もしかしたらこのような結果もありうるのではと考えていました」

実況　「と言いますと？」
足軽　「元々、ピョン吉は自分の力を過信するとこがありましたし、何と言ってもチャラいですから、汗水たらして努力するということが嫌いな奴でもありますので、もしかたらと……」
実況　「なるほど……監督からも一言いただけますか？」
監督　「そうですねえ……自信は必要ですが、才能を過信し過ぎては良くないですね。どんな強い選手でも過信すると必ず落とし穴に落ちる時があります。そうなってから気づくのか、そうなる前に気づくのかということでしょう。ピョン吉がこれで気付いてくれることを願っています」
実況　「ありがとうございます！確かに監督の言う通りですね。ピョン吉は自分の力を過信したばかりに、そこに奢りが出たということではないでしょうか。今後のピョン吉の成長に期待したいと思います。そして、亀次郎は奇跡を起こしたということになります。これについてはどうでしょう。まず、足軽さんにお伺いしたいと思います」
足軽　「はい。わたし達はとんでもない奇跡を目の当たりにしたと思います。亀次郎の姿勢はわたし達に何かを教えてくれたように感じます」
実況　「確かに亀次郎の走る姿は感動を感じさせてくれましたね。監督、いかがですか？」
監督　「そうですね。このレースにおいては結果として亀次郎が勝ったわけですが、このレースは勝ち負けだけではない沢山のモノをわたし達に教

えてくれたのではないでしょうか……」

実況「と言いますと……」

監督「ウサギとカメはどこを見て走ったのかということです」

実況「どこを見て走ったのか……？」

監督「ウサギは沿道に気を奪われてよそ見をしてしまいましたが、カメはゴールだけを見てひたすら走りづけたということです」

実況「おっしゃる通り……確かにそうですね」

監督「歩みの速い遅いではなく、目標を、ゴールをしっかり見定める。そして、そこに向かってゆっくりでもいい、確実に1歩ずつ前に進むことが大切である。それがゴールに結びつくということでしょう」

足軽「そうですね。わたし達はついつい早く結果を出したいと焦ってしまいがちですが、環境がどう変わろうと、自分の道を焦らず粘り強く歩み抜いた人に栄冠は輝くということですね」

実況「自分がどこを見て歩むのかが大切なんですね。それが……奇跡へと繋がるんですね。小出田監督、足軽さん、本日はありがとうございました」

監督・足軽「ありがとうございました」

実況「キジバトちゃんも、実況席に帰ってきてくれました。緊迫感あふれるレポートご苦労様でした」

キジ「ありがとうございま～す！」

実況　「では、またの機会にお目にかかりましょう。次はどんな奇跡に出会えるのか！『ウサギとカメの世紀の大決戦』中継現場からバード・白鳥がお送りしました！御機嫌よう！」

暗転

【誓い】

灯りが付くと、向かい合って椅子に座っている男性２人。
場所は不明。

①「（唐突に）結婚して欲しい！」
②「（終始、女性っぽいしぐさ）嬉しい」
①「オレ、本気なんだ！」
②「え、いいの？わたしなんかで？」
①「当たり前だろ。なに言ってんだよ。お前が良いんだよ」
②「ほんと？」
①「お前じゃなきゃダメなんだ」
②「ありがとう」
①「付き合って３年……そろそろ結婚したいなって思ってた」
②「わたしもできればいいなあって思ってたよ」
①「本当か？」
②「うん」
①「ありがとう。これを受け取って欲しい」

宝箱のような形での箱を出す①。

①②「なにこれ？」
①②「俺の夢と希望が入ってるんだよ」

箱を受け取り、あける②。
指輪が出てくる。

②「うわぁ、嬉しい。用意してくれてたの？」
①②「当たり前だろ。前に見に行った時に欲しがってたヤツ」
②①（指輪を見る）素敵」
②①「じゃあ、『うん』って言ってくれるんだな？」
②①「はい」
②①「よっしゃー！サンキュー！ありがとう！じゃあ、目、つぶって」
②①「え？」
①②「目をつぶって」
①②「なんで？」
①②「誓いの……チューだ！」
②①「チュー？ここで？」
①②「俺たちは夫婦になるんだ。恥ずかしがることないだろ」
②①「う、うん……でも、別にここじゃなくても……人もいっぱいいるし」
①②「早く。目をつぶる」

②が目をつぶり①が寄ってきて、②の肩に手をかける。
二人の顔がゆっくりと近づく。

②「（目を開き。素に戻る）うわ、近っ！近いよ（①の椅子を押し戻す）」
①「なんだよ」
②「なんだよってなんだよ。もういいって」
①「しょうがねえだろ。流れというか成り行きというのがあるんだから」
②「それは、『いま』じゃないだろ。なんでこんなとこで誓いのチューなんだよ」
①「いや、だってよ……」
②「だってじゃねえだろ。なんで、チューまで行くんだよ。大体、お前がプロポーズの練習相手になってくれって言うから、思い切ってやってやったのに……」
①「いや、そうだけどよ」
②「オレはだ！お前のためにだな……お前のプロポーズが成功するようにと思ってだ……女っぽい仕草と雰囲気を出したほうがそれっぽいかなと思ってだ……恥ずかしいにもかかわらずだ！」
①「分かったよ、悪かったよ。感謝してるよ。オレはさ、一世一代の勝負どころだと思うからさ、カッコよく決めたいんだよ。ありきたりじゃない、オレだけのプロポをしたいのよ」
②「オレだけのプロポってどういうのよ？」

①「それをお前にも、なんかいいアイデアがないかなと、お力を借りたいわけよ」
②「お力ねえ」
①「一生に一度なんだから、記憶に残るような……シチュエーションとか、セリフがあるだろ。オレは、あいつに奇跡が起こってるようなプロポを味わってもらいたいんだよ」
②「奇跡って言ってもなぁ。お前、映画とか見すぎだよ」
①「そう！まさに映画のような」
②「それって、映画だからいいんじゃないの。現実だと意外と冷めるっていうか引くんじゃないの？」
①「そうかな……？」
②「そうだろ。（タイタニックのポーズをさせる）船に乗って船首の部分で手を広げて後ろからグッと抱きしめて『綺麗な海だろ？これは全部きみのモノだ』とか言いたいか？言ってる自分も引くだろう……」
①「まあな……」
②「彼女の家のベランダの下で片膝ついて『おお～～ジュリエット。わが愛しの君。どうして君はジュリエットなの』って言って、女子が喜ぶか？ジュリエット～！で、奇跡が呼べるか？近所迷惑なだけで引くだろう……」
①「まあな……」
②「だろ。奇跡って言うのはさ、相手の捉え方の問題だろ。こっちがいくら

奇跡を起こしたくても、相手がそれを奇跡だと感じなければ、ワザとらしいだけで、引くだろ」

②①「そりゃそうだ……」

②①「だから！相手がどうとらえるかなんだよ。お前はさ、一生懸命に誠意を持って、君を愛している。君と結婚したいんだ。ということを伝えれば良いんだよ」

①「そうか…」

②①「そうだろ。ありきたりだろうとなんだろうと、気持ちが伝われば良いんだよ、気持ちが！プロポーズしたくなるような人がいて、その人に向かってプロポーズが出来て、もし、それを受け入れてもらえたら、それだけで、奇跡みたいなもんだろ。受け入れるということは、彼女だって同じ気持ちだろうよ」

①「まあな。そうか……そうだな。形じゃないな。要するにハートってヤツだな」

②「そうだよ。ハートだよ」

①「うん。お前、たまには良いこと言うじゃんよ」

②「たまにかよ」

①「じゃあ、これも無い方が良いかな？（カギを出し、格好をつけて）『この驚きと喜びと希望と未来の鍵！総じて《夢の鍵》で、俺の魂が入ってる箱を開けて欲しい』って言って渡そうかなと……」

②　指輪を入れる宝箱を指す。

②「お前さ、言っちゃなんだけど、これじゃあパンドラの箱みたいで逆に雰囲気壊れるんじゃないの？」

①「なんだよ、パンドラの箱って？」

②「あれ？知らないの？」

①「うん」

②①「パンドラの箱っていうのは……ギリシャ神話に出てくる話しで、世の中の災いを入れた箱を、神のゼウスがパンドラという女性に、あけてはいけないと言って渡すんだよ。でも、パンドラは結局その箱をあけちゃうわけさ。そうすると、今まで人間界にはなかったいろいろな災いが飛び出したという話しさ」

①「ふ～ん、お前よく知ってるね。で、どうなるの？」

②「そんな話しはどうでもいいんだよ。いいか……ん～……なんかさ、プロポーズって、もっと厳格っていうか重いモノって捉え方なんじゃないかな女性って」

①「う～ん」

②「いずれにしても、この箱だと軽いというか、プロポーズを茶化しているような、なんか軽んじてる感じがしないか？」

①「するねぇ」

②「あなたはプロポーズという大切な行事を、こんな遊び程度な事として考

えていたのね。みたいに取られちゃうんじゃないか」
①「だねぇ」
②「婚約指輪って言ったら、『こんな箱だろ！』みたいな、オーソドックスな入れ物が一番いいんじゃないのぉ」
①「そうだな。そんな感じがするな」
②「鍵がかかってるとか、かかってないとかの問題じゃないだろ。しかも、鍵、以前にだ、さっきの鍵の決め台詞、クサくてプンプンするね。なんだよ『総じて』って、普通使わないだろ。お前、今までの人生で使ったことあるか『総じて』を」
①「ない」
②「使い慣れない言葉を使うんじゃないよ。違和感ありありだぞ」
①「やっぱり？」
②「仮に、そのパンドラの箱をその鍵で開けるとしてだ、驚きとか喜びとか……未来、夢、どの、どんな鍵で開けるか、それは彼女次第だろ」
①「うーん……」
②「こっちで、どうこう言う問題じゃないんじゃないの」
①「そうだな……」
②「そうだよ！」
①「よし！オレ、素直な気持ちで精一杯プロポーズしてみるよ」
②「そうだよ！頑張れ。オレも応援してるよ」
①「おう！さすが、持つべきものは友だな」

②「まあな」
①「なんかお前がカッコよく見えるな」
②「そうか！照れるねえ！」
①「俺が女だったら、絶対お前と結婚してるな」
②「いや、俺はお前が女でも、お前とは絶対結婚しないから」

①は近寄り②の腕を取り、女性っぽく話す。

①「なんでよ。いいじゃない」
②「うわッ、バカ、くっつくなよ。気持ちわりぃだろ」
①「なんで、そんなこと言うのよ。意地悪！」
②「（客席を指し）みんな、見てるだろ！」
①「人に見られて困るようなことなんてないも～ん！ぎゅ！（抱きつく）」
②「うわっ！」

暗転

【エピローグ】

車が行きかう音が聞こえる。
スクランブル交差点。
信号機が青になり、視覚障害者用交通信号付加装置から横断可能な音楽が流れる。
交差点を渡ってくる男性。にこやかな表情でボストンバックを肩に担いでいる。（願いの金メダルをとった息子）
別の方角からにこやかに交差点を渡ってくる男性。白衣を着ている。手に植木鉢に入った植木を持っている。（新種の教授）
別の方角からにこやかに交差点を渡ってくる男性。サンタクロースの上着を手に持っている。（任務の５号）
別の方角から女性が交差点を渡ってくる。左の薬指にハメている指輪を嬉しそうに見ている。（誓いのプロポーズされた女性）
交差点の中央に向かって歩いている４人。
白衣の男性とサンタクロースの男性がすれ違い、ボストンバックの男性と指輪の女性がすれ違う。その瞬間、ボストンバックの男性と指輪の女性がぶつかりそうになる。
男性はサッと身をかわす。男性のバックの紐に金メダルが下がっている。
皆が交差点を渡り終え去って行く。

手にハロウィングッズを持った男性が現れる。後ろ姿で顔は見えない。
墓前の前に進みしゃがみ込んで手を合わせる。（ハロウィンの新郎）
亀が現れる。後ろ姿で顔は見えない。立ち止まって1番のポーズ。
（ウサギとカメの亀治郎）

暗転

暗転の中、箱の閉まる音。
錠のかかる音が聞こえる。

幕